

平成 22 年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立羽咋工業高等学校				
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 公開授業や校内外の研修を通して指導力・技術力のアップに努め、分かる授業を展開し、生徒の基礎学力の定着と学力向上をめざす。	研究授業の事前教科研修会や研究協議会、公開授業を充実させ、各教科と学科を核にした授業改善に取り組む。	各教科と学科で授業改善についての取組を行った A 各学期に3回以上取り組んだ B 各学期に2回取り組んだ C 各学期に1回取り組んだ D 全く取り組む事ができなかった	教職員対象に 12月にアンケート A: 24% B: 43% C: 30% D: 3% 評価: C・D合わせて 33%	教職員対象のアンケート結果は、C・Dを合わせて33%となり、7月のアンケート結果の50%に比べると改善し、判断基準をクリアした。しかし、まだ1/3の先生が、あまり授業改善に取り組んでいない状況にあり、今後も意識を高めて行く工夫が必要である。2学期に多くの研究授業と研究協議会が行われ、全員が互観授業を行った結果、昨年度より20ポイント減少している現状を踏まえ、次年度はさらに各教科と学科を核にした「事前協議会」や「事後協議会」を充実させ、教科の枠を越えた「授業改善」への取り組みの雰囲気づくりも行っていきたい。
	授業における理解度・達成度の確認を行い、課題やレポート等をとおして基礎学力の向上を図るとともに学習習慣を身に付ける。	課題・レポートなど授業外での学習活動について A 十分取り組むことができた B 十分とはいえないが取り組むことができた C 少しは取り組むことができた D 全く取り組むことができなかった	生徒対象に 12月にアンケート A: 35% B: 49% C: 13% D: 3% 評価: C・D合わせて 16%	生徒対象のアンケート結果は、C・Dを合わせて16%となり、7月のアンケートに比べて2ポイント減少し、判断基準をクリアした。しかし、あわせて調査した家庭学習時間では「ほとんどしなかった」生徒が7月より増加しており、与えられた課題・レポートはしっかりするようになってきているが、授業外での自発的な学習につながっていない。次年度も、課題・レポート等の内容と出題量に工夫を重ねるとともに、資格取得に向けた学習をさらに授業に関連付けるなどして、学力向上と学習習慣を身に付けさせたい。また、次年度に向け、C・Dを合わせて50%となっている判定基準を25%程度に変更して取組を継続していきたい。
	定期考査1週間前より、部活動での学習会や、個別面談・個別指導等を増加させ、学習意欲の向上を図る。	部学習会や個別面談、個別指導等を行った部が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	各部顧問対象に 12月にアンケート 実施: 86% 評価: B	昨年度、最終評価は81%、今年度86%なので学習意欲の向上を呼びかけた成果があらわれている。中間評価で文化部の取組が少ないことが明らかになったため、文化部顧問に協力・対応をお願いした。次年度も引き続き、HR担任・教科担任・部顧問のそれぞれの立場から、生徒への学習の大切さや取組について指導をしていきたい。
	調べ学習や読書習慣を身に付けさせ、図書室の利用を促す。	2学期末での図書室の延べ利用者数が A 3,400人以上 (1学期末1,400人以上) B 3,300人～3,399人 (1学期末1,300人～) C 3,200人～3,299人 (1学期末1,200人～) D 3,200人未満 (1学期末1,200人未満)	2学期末延べ利用者数 4,744人 (1学期利用者数 1581人) 評価: A	年間図書室利用者数、貸出冊数の増加を目指し、学年や教科での調べ学習による取組の成果がみられ、目標数を上回ることができた。生徒の手による本の紹介や、図書室の案内を掲示することにより昼食時間や放課後の利用者数も増えた。次年度は、図書委員の活動として読書カード等を作成し、読書習慣を身につけさせ、図書室利用の定着を図りたい。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動ごとの学習会は今後も継続し、内容をさらに充実させて欲しい。また、家庭での学習時間を確保していくことも重要ではないか。 ・図書室延べ利用者数は昨年度より多くなっているのは結構なことだが、1日当たりの利用者数に換算すれば20人弱であり、一般的には利用者数が多いとはいえないのではないか。また、ベストセラー本は迅速な対応で図書室に入れ、生徒の興味関心を刺激し、反応などを観察して欲しい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習ができる物理的な時間には個人差があることを踏まえ、学習に対する目的意識を高めたり、隙間時間の有効な使い方をさらに工夫・指導していく。 ・生徒が図書室にもっと興味関心を持てるようにベストセラーや話題になっている本をいち早く購入し、図書委員を活用しながら広報活動を充実させたい。 			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2. 資格取得を奨励し、高度な資格への挑戦意欲を高めるとともに、補習体制を確立し合格者の増加をめざす。	各科・コースで資格について課外補習等を充実させる。	放課後や休日の補習について A 十分取り組むことができた B 十分とはいえないが取り組むことができた C 少しは取り組むことができた D 全く取り組むことができなかった	教職員対象に 12月にアンケート A: 24% B: 62% C: 14% D: 0% 評価: C・D合わせて14%	教職員対象のアンケート結果は、C・D評価あわせて14%で再検討の基準である30%の判断基準をクリアした。A・B評価はあわせて86%で高い評価結果であった。しかし、A評価よりもB評価が大多数であり、次年度はA評価を増加させ、生徒の資格取得に直結するように補習内容を一層工夫・充実させていく必要がある。
	希望進路の実現に対する資格取得の説明機会を増やすとともに、課外補習を充実させ資格試験の合格者数を増加させる。	年度末での資格試験延べ合格者数が学校全体で A 1,000人以上 B 800人以上 1,000人未満 C 600人以上 800人未満 D 600人未満	年度末に集計 評価: B	3月中旬段階での資格試験の延べ合格者数は962人である。各学科・コースで重点資格等についての補習(朝・放課後等)を実施し、学校全体での合格者数は昨年とほぼ同数であった。1年生の資格に関する取り組み意識がさらに高まるように次年度以降は工夫・改善して、合格者数を増やせるように検討・努力したい。
	高度な資格の内容紹介や受験指導を行うとともに、ジュニアマイスターの点数区分を明示し、多くの資格に挑戦する意識付けを行う	全校のジュニアマイスター認定者数が A 30人以上 B 25人~29人 C 20人~24人 D 19人以下	2月に前・後期分を集計 ゴールド、シルバー合計で35人(ゴールド8人増加) 評価: A	3年生が最後まで資格取得に意欲的に取り組んだ。シルバーの取得者は昨年より1人減って20人であったが、ゴールドの取得者は昨年の7人から一挙に8人増加して15人となった。特に前期よりも後期に照準をあわせてジュニアマイスター取得する2、3年生が目立った。全校生徒に対する指導も着実に結果に現れてきている。 次年度も、全校に対して資格・検定の内容紹介や、ジュニアマイスター制度の意義を説明し、多くの生徒に動機付けを行うことにより、今年度と同じ基準で継続する。
学校関係者評価委員会の評価	・ 資格試験の合格者数が増えたことは評価できる。また、資格の難易度や合格率等も重要な指標であるから生徒はもちろん保護者等に対しても情報を伝えて欲しい。 ・ どんな資格試験が将来の進路に役立つのかといった観点を重視して指導して欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	・ 資格試験については学年ごとの進路説明会をはじめ様々な場面で生徒達に説明しているが、次年度はその内容を一層充実させるとともに保護者に対しての詳しい説明を検討する。 ・ 受験料も高額であるため卒業後の進路志望先で役立つ資格を最優先に取得するように指導していく。			
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
3. 部活動への加入を推奨し、人間性に富み心身ともに健全で逞しい人づくりをめざす。	生徒全員が体力アップの重要性を認識し、個人、クラス、部活動で目標を持って体力向上に努める。	体力アップを達成する生徒が A 70%以上 B 60%以上 70%未満 C 50%以上 60%未満 D 50%未満	12月に調査 64%の生徒が体力アップ 評価: B	体力テストを4月と11月に実施し、この期間で体力アップした生徒は、1・2年生は80%、3年生は33%であった。1・2年生は部活動もあり運動・トレーニングする機会も多いが、3年生は運動の機会が週2回の体育の授業のみである。 次年度は3年生のトレーニング内容を工夫し、体力アップについて方を考えたい。
	本校の運動部は、能登地区のリーダー的存在であることを自覚させ、各部において県高校総体・新人大会でベスト8以上を目指す。	ベスト8以上の運動部が A 50%以上(9部以上) B 40%以上 50%未満(7~8部) C 30%以上 40%未満(6部) D 30%未満(5部)	12月に調査 ベスト8以上の運動部が 総体7部 新人8部 評価: B	総体で7部、新人で8部がベスト8以上であった。総体ではソフトテニス部が準優勝、新人大会ではバレーボール部が3位、ラグビー部が準優勝と上位に入賞している。野球部も秋季大会で3位入賞を果たした。ベスト8以外の部でも入賞目指し、日々努力しており、上位入賞を学校全体の目標にかかげた成果がややあらわれてきている。 より啓蒙し、高体連表彰敢闘賞(学級数12クラス以内の高校で最も得点が高い学校)を次年度は獲得したい。
	文化部において、部の重複加入を奨励し、学校祭以外にも校内外での発表・展示・公開の機会をさらに増加させる。	学校祭以外で発表、展示、公開練習等の機会を持った回数が A 3回以上 B 2回 C 1回 D 0回	各文化部顧問対象に 12月アンケート A: 7部 B: 0部 C: 1部 D: 5部 評価: C・D合わせて46%	文化部13部のうち日常活動している部は8部。このうち7部が3回以上発表・展示しており、中には9回も機会を持った部もある。昨年よりも発表の回数は多くなり、より活発な活動になってきている。部の現状を考慮すると、成果は大きくあらわれている。 次年度も引き続き取り組んでいきたい。
	生徒会が中心となり、行事への参画意識を高め、生徒からの意見を十分取り入れた行事にする。	生徒会行事に満足していますか A たいへん満足した B おおむね満足した C あまり満足できなかった D まったく満足できなかった	生徒対象に 12月にアンケート A: 28% B: 58% C: 10% D: 3% 評価: C・D合わせて13%	どの生徒会行事も生徒会が自発的に運営し、生徒に対しての細かい配慮がなされていた。より良いものにしてほしいという意識が高く、工夫の跡が見られたため満足度が高かった。特に羽工祭では94%の生徒が満足しているという内容であった。 次年度も引き続き取り組んでいきたい。
	精神的な悩みを持つ生徒に対して、学年、課が連携し組織的に支援する。	精神的な悩みを持つ生徒に対する職員の支援が A よく行われている B おおむね行われている C あまり行われていない D まったく行われていない	教職員対象に 12月アンケート A: 24% B: 65% C: 11% D: 0% 評価: C・D合わせて11%	C・D合わせて11%であり、判断基準をクリアすることができた。不登校ぎみの生徒は数名いたが、担任をはじめ、関係する職員が家庭訪問や面談、さらに他の職員へ情報提供をし、対応した。次年度は、気になる生徒を継続して見守りつつ、新たに悩みを持つ生徒にも対応していかなくてはならない。そのためには、学年や課における情報交換を密にして、組織的連携をさらに深めていく必要がある。
学校関係者評価委員会の評価	・ の結果は良いので今後も取組を継続して欲しい。また、悩みを抱えながらも相談できない生徒に対してのケアをさらに推し進めて欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	・ 一人ひとりの生徒の変化を見逃さないように教員間で生徒に関する情報交換を密にすることで悩みを抱える生徒を早期に把握し、いろんな会議で情報を共有し対応を検討していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
4 企業が求める人材の育成に努めると共に、早期からの求人開拓で求人数の増加を図り、進路講演会や綿密な個人面談・面接指導等の徹底により、希望の進路実現をめざす。	進路説明会やLHなどで進路に向けた情報提供を行うことにより、適切な進路選択を促進させる。	進路説明会・LHなどによる説明や配布した進路情報により A 十分に進路意識が高まった B 少し進路意識が高まった C あまり進路意識につながらなかった D ほとんどつながらなかった	生徒対象に 12月アンケート A: 34% B: 52% C: 11% D: 2% 評価: C・D合わせて13%	C・D合わせて13%であり、前期(12%)同様に判断基準をクリアしている。学年別では、(3年6%、2年13%、1年21%)である。学年を追うごとに進路意識が高まっている。進路意識を早い時期から、継続して持たせていくことが、自己実現には大切である。進路資料や説明会をさらに充実させるとともに、進路指導室を有効に使った進路資料の活用方法や、進路面談等により細かな対応を考えていきたい。
	進路希望の達成のために指導の充実を図る。 ・基礎学力の定着を図り、試験対策を十分に行う。 ・外部講師による講演や面接指導、担任による個別面談を充実させる。	学力テストや面接指導等により A 実力がついた B まあまあ実力がついた C あまり実力がつかなかった D まったく実力がつかなかった	3年生を対象に 12月アンケート A: 28% B: 58% C: 14% D: 1% 評価: C・D合わせて15%	C・D合わせて15%であり、判断基準をクリアしている。3年生のSHでの朝学習プリントを新たに取り入れ、基礎学力を付けさせた。また、7月から面接指導を繰り返し9月中旬まで継続的に行ってきた。模擬試験や作文・小論文練習を計画的に行った。次年度に向け、すでに2年生には、学年会と協力し、就職基礎問題(11月～)と作文練習(12月～)の取組を継続して行っている。
		就職試験の第1回目試験での内定率が A 85%以上 B 75%以上85%未満 C 65%以上75%未満 D 65%未満	3年生を対象に 秋に調査 60名受験し、55名内定 (内定率: 91.7%) 評価: A	今年度は、Aに該当する。民間企業1回目の受験では、昨年度70%という厳しい状況であった。その反省を踏まえ、地元県内の求人を中心として、新規企業開拓と早くから企業と連絡を密に取り、受験先も早めに絞ってきた。それとともに試験に向けて生徒の意識を高めさせ、面接練習を中心に受験準備に取り組みさせてきた。県内の製造業の求人が増えたこともあり、内定率も高くなった。次年度も、早くからの準備で対応していかなければならない。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 企業は多くの資格を取得したり部活動や生徒会で活躍した生徒を高く評価しており、進路希望の達成には有効であるから一層努力させて欲しい。 就職試験の際の短時間の面接では言葉遣いや立振舞といった礼儀作法を身に付けていることが有利なので面接指導はしっかりと指導して欲しい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 自身を持って面接に臨むためにも日頃の生活態度やコミュニケーション能力を授業や部活動の中でしっかりと指導していく。 厳しい経済状況は次年度も変わらないので、地域からの信頼を得るためにも就職志望者全員が内定を得られるように教職員全体が気を引き締めて次年度も早期から求人開拓等に取り組んでいく。 			
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
5 様々な機会を捉え、環境問題への理解を深めるとともに、全職員・生徒で省エネ活動に取り組み、環境保全への意識を高める。	環境保全についてはこれまでの取組を委ねさせることなく職員・生徒が理解を一層深め、学校全体で取り組みを継続させていく。	環境保全に対し心がけているか A 心がけている B やや心がけている C あまり心がけていない D 心がけていない	生徒対象に12月アンケート A: 40% B: 49% C: 9% D: 2% 評価: C・D合わせて11%	C・Dの計が11%で、7月アンケート(13%)と同様に判断基準をクリアしている。ISO委員の節電呼びかけやISO便りでの地球への恩返しのために実行可能な5項目のアンケート調査などを実施し、生徒の意識の高揚を図ったことと、生徒会の一日一善運動でクラス、部活動の環境保全への取り組みが功を奏し89%の生徒が環境保全に関心を寄せていることが分かった。次年度も継続して環境保全の啓蒙活動に取り組む。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 環境保全に対する意識を高めるためにも電気使用量を減らすといったような目で見える形での数値目標を設定し、自分も力になっていることを実感させることが必要ではないか。 工業高校ならではの風力発電や波力発電などのエネルギー確保の取組をしたらどうか。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 電気使用量計測については取り組んでいた時期もあったが、問題点があって、現在は中止している。しかし、常に生徒が環境保全に対する認識をマンネリ化させずに持ち続けていくためにもこれまでの問題点に改善を加えることによって数値化したら効果が上がりそうな取組やエネルギーを作り出す取組を模索・検討する。 			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
6 地域企業、近隣の小・中学校、地域住民との連携を深め、地域への奉仕活動やインターンシップ等を通じて、社会の一員としての意識を高める。	地域社会や企業と連携し、インターンシップ等のキャリア教育を推進する。	仕事をする事の意義について A 十分理解できた B まあまあ理解できた C あまり理解できなかった D まったく理解できなかった	生徒対象にインターンシップ後にアンケート調査 A : 42% B : 49% C : 9% D : 0% 評価：C・D合わせて9%	アンケート結果よりC・D評価あわせて9%で再検討の基準である20%の判断基準をクリアした。A・B評価はあわせて91%でインターンシップにおける「仕事をする事の意義」を生徒はほぼ理解できたようである。挨拶や礼儀などの事前指導を含めて今後も積極的に取り組んでいく必要があると思われる。なおインターンシップの期間(3日間)を短いと感じる生徒が昨年の8%から今年は24%と16%も増え、仕事に対する意識に変化がみられる。
	地域に貢献する大切さや必要性を認識するために、ボランティア活動を推奨する。	ボランティア活動に参加した回数が A 3回以上 B 2回 C 1回 D 0回	生徒対象に12月アンケート A : 20% B : 25% C : 27% D : 28% 評価：C・D合わせて55%	実際にボランティア活動を推奨・啓蒙したが、自発的なボランティア活動は殆ど無いと思われる。ボランティア清掃は、学校行事としての海岸清掃2回、部活動ボランティアとしての通学路清掃・校外清掃、授業の一環としての保育所訪問などである。また、運動部の加入率が高い本校は、ボランティア活動にいく時間もあまりないのが現実である。次年度はおおげさな「やらされるボランティア」でなく、自発的に行うボランティア精神を涵養し「1日1善」の行為を増やしていきたい。
	社会生活を営む上で、マナーの必要性を説き、認識させる指導により、交通ルールを遵守する生徒を育てる。	自分自身の自転車の乗車マナーについて A ルールを守り安全に運転している B ルールをある程度守り運転している C ルールをあまり守らず運転している D ルールを守らず運転している	生徒対象に12月アンケート A : 27% B : 54% C : 16% D : 3% 評価：C・D合わせて19%	最終的にはC・D合わせて19%であり、各学年とも中間評価よりその数が少し増加している。その内訳は2年生の割合が高い。交通ルールを始め生活態度の意識を高く持てるよう全体集会、学年集会、LH等を通して注意を促し、学年団と課との連携を図りながらより一層組織的に取り組んでいく必要がある。
	ホームページの更新を定期的に行い学校の様子や部活動の成績を発信し、情報公開に努める。	各担当・各部でホームページを更新した回数が A 4回以上 B 3回 C 2回 D 1回以下	各担当・各部対象に12月調査 A : 4% B : 0% C : 4% D : 92% 評価：Dが92%	ホームページ上に掲載しているのは部活動14部 教科(コース)5科、校務分掌5課である。更新回数は総務課5回のみであった。更新回数総数も9回ときわめて少なかった。次年度はアップロードへの働きかけを強くしていく必要がある。また、スムーズな更新の障害になっている部分を洗い出し改善したい。
	本校教育活動について、学校新聞や学校公開の案内などにより地域からの理解促進に努める。	広報等での地域への情報提供を A 5回以上実施した B 4回実施した C 3回実施した D 2回以下	2月に調査 ｽｰﾝ講演会・学校祭 校内マラソン大会・学校公開 課題研究発表会等で5回 情報提供をした。 評価：A	今年度は、町内だけではなく、ポスター等で市内・市外にも情報提供を実施した。学校祭においては、昨年以上に地域の方々の参加があり、学校に対する理解促進につながったと思われる。次年度もより内容を工夫した情報提供を行い、地域に密着した学校作りを目指して取り組みたい。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・全校一斉の海岸清掃等は自発的なものではないという理由で生徒達がボランティア活動の回数にカウントしないのは当然なので評価方法を再検討すべきである。 ・自転車マナーについてはかつての状況よりも格段に改善されている。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ・ について正しい評価ができるように達成度判断基準を見直し、自発的なボランティアが増加するような取組を検討する。 ・ 「自転車の乗車マナーを守っていない」と答える生徒もかなりいるので、ルールを守ることが社会人として必要であることをしっかりと指導していく。 			